

第98回 災害時に流言飛語はつきもの

IT生

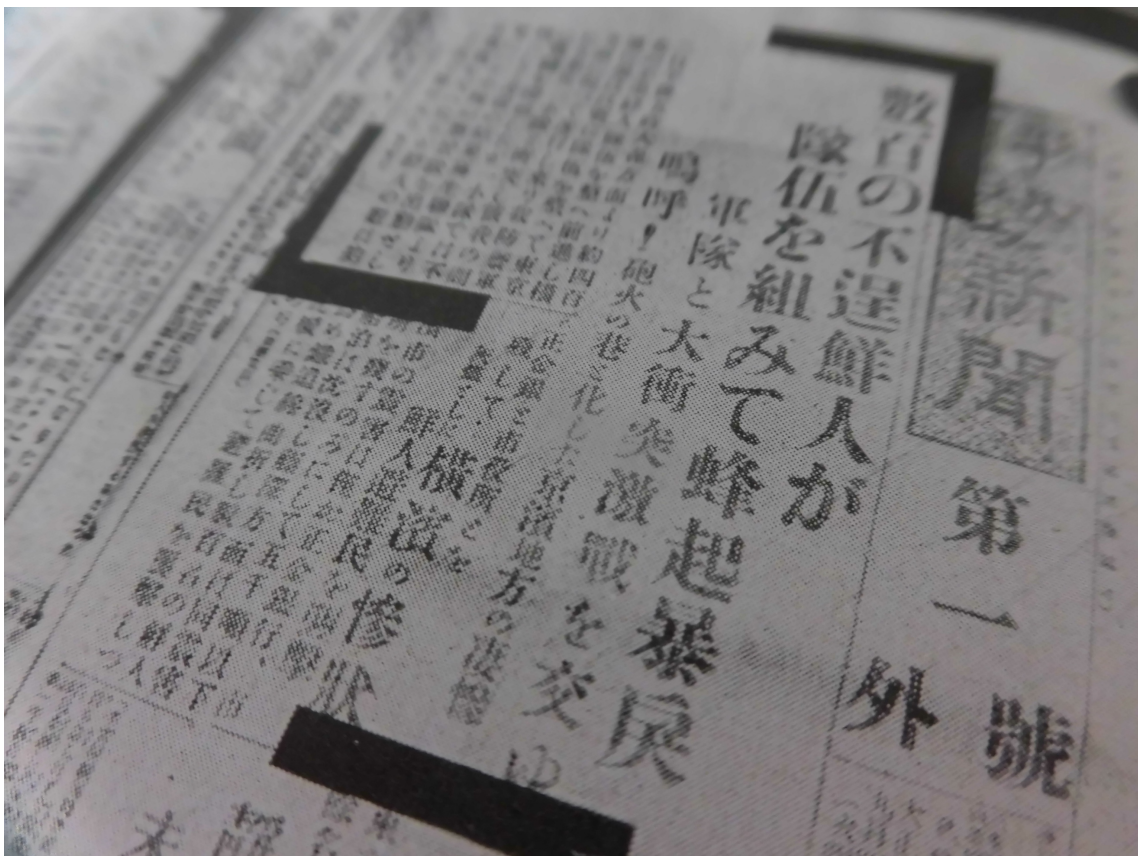
関東大震災から100年に関する報道で目立ったのは、朝鮮人の虐殺話だった。

近年のネット情報の広がりといまあって、おおむね「フェイクニュース」に気を付けよう、発信者にならないようにしようという筋書きとなっている。

はて、と思う。

災害時は社会が混乱し、人々の不安感が増すから、流言飛語のたぐいはつきものである。

そんなことにかまけている暇があったら、一刻も早く、被災地から立ち去るべきだというのが正解。局所的な、1月後ぐらいには、なんとか再建の先行きがみえそうなどという災害規模ならともかく、首都直下や南海トラフ規模の地震の被災地では、被災地に留まることは、すなわち、命を危険にさらすということになる。



なぜか被災地から遠い三重県の新聞で朝鮮人の暴動が報道されていた

都内に住んでいる親戚家族には、首都直下が起きれば、ただちに、荷物をまとめ、迂回ルートを取り、神戸に避難すべしと提案している。そのための事前準備、神戸にくるまでの備蓄、災害用トイレ、ガソリン、そして、神戸までの安全なルートを事前に模索しておく。出発までに家族がいかにして安全に参集するのかというルールを決めておく。こうした情報リテラシーを高めておけば、そもそも、流言飛語に左右されることはなくなる。まっしぐらに神戸に向かうという行動以外、何も必要がないのだから、そもそも情報収集は必要ない。

一番極端な分かりやすい例を挙げれば、津波からの避難対策だろう。大きな揺れを感じたら、ただちに安全な場所に逃げる、こと以外、何も必要ない。情報など全く必要ないのだ。関東大震災の教訓と称して、流言飛語を取り上げること自体、防災の本質への視点を欠いた「流言飛語的」情報であると断じたいところだ。

(令和5年9月)